

## 将来への提言

2004年度 日本学生オリエンテーリング選手権大会  
ミドル・ディスタンス、リレー競技部門 実行委員長  
針谷 尚幸

日本学生オリエンテーリング選手権大会実施規則第 12 条に基づき、『将来への提言』を以下に記します。なお、日本学生オリエンテーリング選手権大会をインカレという略語で記してあります。

### 1. 初のインカレミドル・リレー形式について

私は従来のロング・リレー形式の運営をした経験がないので推測を多分に含みますが、近年の関東開催のロング・リレー形式と比較して、今回の運営規模、負担は同程度だったと推測されます。ただし、調査に要した負担は、ロングとミドルの競技面積の違いや、ミドルとリレーで同じ範囲を利用した点から、やや減少していると思われる。春開催と秋開催の負担の分配という観点では、ロングとミドル・リレー形式にしたことは一定の効果があったと思われます。

しかしながら、後述するとおり、全体の総負担量が多少軽減されたとはいえ、運営者とくに調査者の人材不足や経験不足が解消されない限り、一人あたりの負担量はむしろ増大しており、運営者一人あたりの負担量の問題は依然、解消されていないといえるでしょう。ただし、後にも述べますがトレイル競技の併催が原因の一部となっており、これは併催形式を変えることで、一部解消されると思われます。

### 2. 男子選手権クラス3人制について

今年度より、男子リレーが3人制になりましたが、ウィニングタイムもおおむね想定されていた時間に近く、また完走率も向上されたため、一定の効果があったと思われます。

しかし、一方で、男子選手権クラスの入賞ラインに絡む選手のゴール時刻と、女子選手権クラスの優勝チームのゴールタイムが接近しました。そのため、女子選手権クラスのウィニングランを許可しない方が無難であったという意見もあります。今後の大会のコース設定次第では、今回の場合と男女が逆になったり、あるいは男女の優勝ゴール時間が同じになったりすることも想定され、ウィニングランが制限される場合が多くなるのが想定されます。よりウィニングランを許可しやすいようにするため、男女のウィニングタイムに差異をつけるのも、一考の余地があると思われます。

### 3. 運営者とくに調査者の不足、およびその弊害について

#### 3.1 運営者層の若年化

今回に限らず、実行委員は実行委員長や主要メンバーのコネクションによって運営者が集められることが多いと思います。今回の実行委員も、私と同期の98年入学（OB・OG3年目）が中心となり、OB・OG1～3年目を中心に形成されました。OB3年目の実行委員長は、1998年3月開催のインカレ以来であり、例年よりも若い年代のメンバーで形成されたこととなります。

しかし、実行委員会の年代の層がシフトあるいは圧縮されたことにより、次のような弊害が生じました。

- インカレ運営経験がない責任者、チーフ、実行委員が大半を占めたため、全体的に経験不足であった
- 実行委員の募集に際し、一部の人間のコネクションに頼らざるを得なかった部分が大きいこと、一部の

大学のOB・OG、とくに現役とつながりの深い、あるいは学生で時間の割きやすいOB・OG1～2年目が多く実行委員に登用されることで、一部の大学の現役生に対するインカレのアドバイスが制限された部分があったかもしれません

### 3.2 調査者の不足とその対策

運営者が不足していたわけですが、とくに傾向が顕著だったのは調査者です。調査に当たっては、私から見ても大先輩にあたる方々の力が不可欠な状況になりました。通常ならば、技術的にやむを得ない仕方のない部分のみお願いすべきだと思いますが、調査人員の不足から技術的な面だけでなく、時間的な面も含め、多大な労力を払っていただきました。また、私を含めた責任者、チーフが調査者を兼任することもありました。これらの点は、決して望ましい傾向とはいえ、今後の改善が望まれます。とくに、今回のインカレの場合、GPS機材貸し出しの関係から2週間連続でGPS調査を行いました。一部の院生の調査者にかかなりの負担を与えてしまいました。また、業者が実行委員会組織以前に依頼していた外国人調査者の調査（およそ全体の40%の範囲）が隣接範囲のGPS調査と看過できない歪みが生じており、外国人範囲に改めてGPSを投入することになり、スケジュールを逼迫させる要因となりました。

これらの課題の一つの対策としては、調査期間を長期に取ることが挙げられます。調査者も、仕事や研究を抱えている身であり、連続して休暇を調査に充てることで相当の負担がかかってしまっているのが現状です。調査期間を長く取ること、調査者の負担を少しでも減少させることができると考えられます。そのためには、早期の開催地決定と実行委員会組織が必須となります。近年、実行委員会が組織されてから開催まで1年より短い期間となっていますが、過去には4年前から開催地を仮決定しており、実行委員会も2年前から組織されていたことを考えれば、実行可能と考えられます。

### 3.3 学生の運営参加について

運営者が不足しているという現状は前述したとおりですが、一方で経費削減のため実行委員数を減少させるという動きもあります。そのためには、学生に可能な部分の運営参加は必要不可欠であると考えられます。今回の運営においても、開会式や会場の清掃など学生の協力が多大にあったことを記しておきます。今後も、この傾向は継続するのが望ましいと考えられます。

ただし、依頼する過程で、情報の伝達に不備があったり、一部の学連幹事に負担がかかっていたりしたようですので、実行委員側とともに学生（学連）の窓口、協力する内容の振り分け方を整備する必要があるように思われます。

## 4. インカレ予算の経費削減について

前節で、経費削減のため実行委員を減少させる方向にあると述べましたが、経費削減のために行ったことはそのほかにもあります。主だったものとしては、地図をジェネシスマッピング社から別の印刷業者に委託するのではなく、ジェネシスマッピング社のカラープリンターで印刷を行ったことがあげられます。結果的にどれだけ経費削減に繋がったかは確認が取れていませんが、地図印刷の品質について、大きく問題になったことはないようなので、この試みは一応の成果があったといえるといえます。今後についても、参加者数が減少傾向にある中では、競技性などを損なわない範囲で経費を抑える努力がなされるべきだと思います。

## 5. トレイルOについて

今回のインカレでは、ミドル開催日にトレイルOを併催しましたが、空間的、時間的、人員的問題の3点から、今後のインカレミドル・リレーではトレイルOを併催すべきではなく、併催するならばロングと共にすべ

きだと思われます。

まず、空間的にリレーやAファイナルとの共存は困難な課題であると思われます。Aファイナル、リレーは、会場付近のビジュアル区間を基本的には設定しているため、立入りが制限されるためです。また、開催トレイン、会場によって、個別に開催を考慮する必要があると思われます。たとえば、2003年度伊賀インカレのようなトレイン、会場で開催される場合には、会場から山林に入る人の流れや会場内に十分な広さが取れるため、トレイルOを開催するのに支障はなかったと推察されますが、今回のような、狭い会場である場合や、会場から山林に入る流れが限られる場合、コースセットにフットO、トレイルOともに困難な問題を抱えることになると思われます。

次に、時間的にミドル、リレーとの共存は困難な課題であると思われます。ミドルは、選手権クラスについては、午前と午後レースがあり、その間にトレイルOをするのは、時間的制約が大きいと思われます。選手によって、時間的余裕にかなりの差異が生じてしまう恐れがあります。また、各レースに十分な競技時間を確保しようとすると、タイムテーブル作成上、困難な課題を抱えざるを得ないといえます。

最後に、前述したとおり、運営経費の省力化のために、実行委員数を減らすという動きがあります。しかしながら、トレイルOを開催することで、実行委員数が増えてしまい、その方向に逆行する結果になります。

#### 6. 表彰式に関する問題点

年々、表彰式における行動が派手になっているように見受けられますが、近年の傾向は目に余るものがあります。表彰式は、あくまで成績上位者に敬意をはらって、その成果を表彰するのが本来の目的であるはずですが。表彰対象者が嬉しさを表現する一つの手段としてパフォーマンスめいたことをするのはまだしも、選手以外の人間が壇上に上がり、傍若無人な振る舞いをするのは度が過ぎていると思われます。今後、このような傾向が続くようであるならば、表彰式のあり方についても一考すべきかと思われます。

#### 7. リレーの地図置場に関する問題点

リレー地図置き場において、強風によって地図が散乱したため、参加者の地図が見当たらなくなり、一部の一般クラスの選手を1、2分待たすという事態が生じました。前日のミドル開催日に強風が吹き荒れたのを考慮し、対策を施しましたが、不十分でした。今後のインカレでは充分に考慮すべき事項と思われます。

#### 8. 新入生の教育問題

新入生と思われますが、スタート地区において

- ナンバーカードがない学生
- 「自分のスタート時間・クラスはなにか」と役員に質問をする学生

が現れたため、スタート役員が困惑したという事態が生じました。ともに、要項3(プログラム)に記載されており、新入生であっても当然理解して参加すべき事項です。各大学で新人に基本的なルールを教える機会が不十分であるならば、学連などもっと大きな単位で教える機会を設けるのを一考すべきではないでしょうか。

以上